



TITLE:

知られざる亡命知識人：南部での経験

AUTHOR(S):

前川, 玲子

CITATION:

前川, 玲子. 知られざる亡命知識人：南部での経験. 英文学評論 2012, 84: 69-99

ISSUE DATE:

2012-02

URL:

https://doi.org/10.14989/RevEL_84_69

RIGHT:

知られざる亡命知識人

—— 南部での経験 ——

前 川 玲 子

はじめに

1930年代から40年代にかけて多くのヨーロッパの知識人がナチズムを逃れてアメリカにやってきたことはよく知られている。モーリス・デイヴィ（Maurice R. Davie）は、『アメリカの難民——ヨーロッパからの最近の移民に関する調査委員会レポート』の中で、ヒトラーが実権を掌握した1933年から連合軍によるパリ解放の44年までの間に、ナチスやその他のファシズム体制を逃れてアメリカに入国したヨーロッパからの難民は24万から32万人程度と算定している。このうち、教師を含めてなんらかの知的職業についていたのは約2万5,000人程度だとされる。ドナルド・ケント（Donald Kent）は、1933年から1941年にかけてアメリカに到着したドイツとオーストリアからの亡命者約10万4,000人のうち、学者は約7,600人だったという¹。

1 Maurice R. Davie, *Refugees in America: Report of the Committee for the Study of Recent Immigration from Europe* (New York: Harper & Brothers, 1947), 23–24, 41; Donald Peterson Kent, *The Refugee Intellectual: The Americanization of the Immigrants of 1933–1941* (New York: Columbia University Press, 1953), 11–12.

1933年4月、ナチスの職業官吏団再建法により大学教員の追放が始まると、それはイギリス、アメリカの新聞でも取り上げられ、著名な学者のイギリス、アメリカ、および他の地域への移住を支援する動きも活発化した²。1933年以降アメリカに到着した亡命知識人の多くの最初の定住先は、ニューヨーク、ないしはその周辺の東部地域であった。しかし、1938年のオーストリア併合、1939年の第二次世界大戦の開始によってヨーロッパ全域に難民が増えるなかで、ドイツやオーストリア、およびその他のナチス支配地域から追われてフランス、イギリスなどに亡命していた知識人が、1930年代末には最後の避難所を求めてアメリカに殺到した。数々の支援団体がこうした新来の亡命学者の生活の場と就職場所の確保を目指して財団などに働きかけたが、東部の大学および中西部、ないしは西海岸の主要な大学のほとんどはすでに亡命学者を受け入れていた。ヨーロッパで名声を博していた学者たちは就職先に苦勞することはなかったが、有力な推薦者がなかったり学問業績が未熟だと見られたりした学者には、就職先を選ぶ贅沢は許されなかった。

このような状況のなかで、就職先に苦勞していた亡命学者を南部の大学に配置しようとする動きがあった。亡命学者の一部は、ノースカロライナ州のブラック・マウンテン・カレッジのような南部に出現した進歩的実験校に集まってき

2 「職業官吏団再建法」に基づく大学教員追放に関しては、Claus-Dieter Krohn, *Intellectuals in Exile: Refugee Scholars and the New School for Social Research*, trans. Rita and Robert Kimber (1987; Cambridge: University of Massachusetts Press, 1993), 12-14; 澤井敦『カール・マンハイム——時代を診断する亡命者』(東信堂、2004)などが参考になる。なおこの追放の波紋については拙文「境界線上の亡命知識人——パウル・ティリッヒと大戦間期のアメリカ」『英文学評論』83(2011)でも扱っている。援助活動に関しては、Norman Bentwich, *The Rescue and Achievement of Refugee Scholars: The Story of Displaced Scholars and Scientists 1933-1952* (Hague: Martinus Nijhoff, 1953); Lord Beveridge, *A Defense of Free Learning* (London: Oxford University Press, 1959)などを参照されたい。

て、絵画、音楽、リベラル・アーツ全般にわたり、主に白人の学生に大きな影響を与えた。ノースカロライナは南部州のひとつであり、亡命知識人が移住した時代、水飲み場から教育機関にいたるまで人種隔離は法制上および日常的習慣として地元の文化の一部になっていた³。学生に多くの権利を与え、理想のコミュニティ建設を追求したブラック・マウンテン・カレッジは、1940年代には、黒人学生の入学を許可するかどうかをめぐる教授陣のなかで意見が分かれた。ナチスを逃れてこの山奥の大学を避難所を選んだ亡命知識人も、この問題に関して一枚岩ではなかった。賛成派、反対派、保留派に分かれた点では、亡命学者もアメリカ生まれの学者も同様であった。しかし、40年代後半には、黒人学生のみならず黒人教員を積極的にリクルートする方向に傾いていったが、その動きの中心にいたのは亡命知識人だった。1933年に開校したブラック・マウンテン・カレッジは1956年にその短い歴史を終えたため、公民権運動の盛り上がりを目撃することはなかった。しかし、地元の保守派から「黒人びいきの避難所」(haven for nigger-lovers)と揶揄されたこの進歩的大学は、アメリカ人学者、亡命人学者、学生を巻き込んだ論争のなかから、南部の慣習に小さな風穴をあけていった。

このように白人進歩派知識人の教育的実験に参加した亡命知識人が、彼らの「南部」体験をしたのと同時期に、学生のほとんどがアフリカ系アメリカ人であったいわゆる「歴史的な黒人単科および総合大学」(Historically Black Colleges

3 南部という分類はアメリカの公式の資料や統計にはないが、通常南部に区分されるのは、「メイソン＝ディクソン・ライン」の南に位置するメリーランド、ウェストヴァージニア、ヴァージニア、ケンタッキー、ミズーリ、ノースカロライナ、サウスカロライナ、ジョージア、テネシー、アーカンソー、フロリダ、アラバマ、ミシシッピ、ルイジアナ、テキサスの各州とされる。

and Universities)』⁴で教職に就いた亡命学者もいた。一般的に文化的な後進地と見られていた南部の大学での就職を希望するアメリカ人は少なかったが、特に「黒人大学」への就職は学者としての経歴にマイナスだと考える者が多かった。したがって、こうした大学は優秀なヨーロッパからの学者を招聘することにメリットがあると感じ、一方、生活の糧を得る事、そしてヨーロッパでの教育・研究活動の継続を望んだ学者たちは、自分たちに生活および知的な避難場所を与えてくれる教育機関を歓迎した。「黒人大学」に、ナチズムの政治的・人種的迫害からの「避難所」を求めた亡命知識人たちは、大学の位置する南部の町の白人コミュニティ、黒人コミュニティ、さらには大学の中でも孤独を強いられることになった。そのため短期間の滞在で南部を後にする亡命学者もいたが、他方で、移住した土地と教育機関に愛着をもって多くの学生を育てた亡命学者も少なくはなかった。こうした大学から、後の公民権活動家や社会学者、芸術家が育ってゆき、彼らの多くは「亡命学者の影響」を語ることになる。

本論文では、ブラック・マウンテン・カレッジに集まった複数の亡命知識人たちの「南部体験」と、複数の「黒人大学」に点在した亡命知識人の体験に焦点をあて、彼らの見た 1930 年代から 40 年代にかけてのアメリカ南部、アメリカ人学者や学生との遭遇のなかで生じた軋轢、対話、人種関係における変化

4 本論文では、Historically Black Colleges and Universities (HBCU、歴史的な黒人単科および総合大学)の略称日本語表記として「黒人大学」を用いることにする。そのため、現在一般的なアフリカ系アメリカ人ではなく黒人という呼称を使う。なお HBCU については Giovanni Lucisano ed., *America's Historically Black Colleges and Universities* (New York: Nova Science Publishers, 2010) を参考にした。この本の 7 章の “List of HBCUs — White House Initiative on Historically Black College and Universities” には、40 校の 4 年制公立大学、50 校の 4 年制私立大学、13 校の公立短期〔2 年生〕大学が挙げられている。多くの HBCU はいわゆる南部州に点在し、人種隔離政策の下、アフリカ系アメリカ人が高等教育を受けられる唯一の教育機関だった。現在 HBCU は、アメリカの高等教育機関の 2.3% を占め、黒人大学生の約 11.6% がこれらの大学で学んでいるという。

などについて考察を巡らせたいと思う。そしてまた、知られざる亡命学者が直接的、間接的にその移住の地にもたらした影響があったとしたら、それはどのようなものであり、いかなる意義があるのかについても触れたい。亡命の経過、思想的信条、学問領域、およびパーソナリティにおいて極めて多様な亡命知識人たちの南部での体験は、それぞれに独自のものであり、安易な単純化や二項対立的な議論は慎まなければならない。とはいえ、これまで亡命知識人史のなかで比較的語られることの少なかった南部での経験に光をあてることで、亡命知識人がアメリカに与えた変化の深度と範囲を測定する一つの手掛かりが得られるかもしれないと考える。

1. ブラック・マウンテン・カレッジと亡命知識人

ブラック・マウンテン・カレッジの歴史、および、そこに集まった亡命知識人——特にヨーゼフ・アルバーズ（Josef Albers, 1888-1976）についてはすでに多くの先行研究があるが⁵、ここでは、なぜこの短命に終わった実験的大学に多くの亡命学者が集まったのかというところから、書き起こしていこう。ブラック・マウンテン・カレッジ創設の発端となったのは、1933年にフロリダ州のロリンズ・カレッジ（Rollins College）で古典を教えていたジョン・アンドリュー・ライス（John Andrew Rice）が学長と対立、解雇された事件だった。やや風変わりな言動と旺盛な批判精神で知られたライスは、解雇を不満だとして全米大学教員協会に仲裁を要請したが、学長は、協会側のライスに有利な判定を無視して解雇に踏み切った。ライスは自分で理想のリベラル・アーツのカレッジを創

5 アルバーズの芸術論に関しては本論文では触れることはできなかったが、天貝義教「ブラック・マウンテン・カレッジにおけるバウハウスの影響とその発展」『デザイン学研究』44: 4 (1997): 39-48; Eva Diaz, “The Ethics of Perception: Josef Albers in the United States,” *The Art Bulletin* 90 (June 2008): 260-285 などが参考になる。

ることを思いつき、ライスへの処分抗議のため解雇されたり、辞職に追い込まれたりした同僚、さらに退学した学生の何人かが、この実験に加わった⁶。実は、ロリンズ・カレッジ自体も、未開のフロンティアにリベラル・アーツの光をもたらそうとしたプロテスタントの組合教会派によって、1885年に創設された大学だった⁷。だが、1933年の時点で大学は建学の精神から程遠い単なる教育機関 (institution) になっていると、ライスたちには思えた。彼らの求めていたのは、「個人の独自性に重きを置くカリキュラムを持ち、講師と学生との自由な意見交換が理事会の支配体制の下で阻害されず、さらに、開かれた誠実な対話が、授業だけではなくコミュニティにおける協働・共生の生活の中心となるような小さな大学」⁸であった。ライスはジョン・デューイの友人でもあったが、進歩派教育者の唱える科学主義的な姿勢には共感を覚えられず、「アメリカの大学は社会的あるいは知的な発展に重点を置きすぎ、全人的な人間を育てることに失敗している」⁹と考えていた。こうした全人的教育を助けるものとして芸術教育をカリキュラムの中心に据えることが構想されたのである。こうした考えは実はライスに独自のものだったわけではなく、1930年代アメリカにおける大学教育の新たな模索と連動するものだった。例えば1932年には、視覚芸術や舞台芸術をリベラル・アーツの中に取り入れたベニングトン・カレッジ (Bennington College) がバーモント州に創設され、またニューヨー

6 Martin Duberman, *Black Mountain: An Exploration in Community* (1972; Evanston, Ill.: Northwestern University Press, 2009), 1-10.

7 <http://www.rollins.edu/why-rollins/history.html> (accessed on November 20, 2011)などを参照した。

8 Mervin Lane, "Introduction," *Black Mountain College Sprouted Seeds: An Anthology of Personal Accounts*, ed. Marvin Lane (Knoxville: University of Tennessee Press, 1990), 2.

9 John Andrew Rice, "Black Mountain College Memoirs," in *Black Mountain College Sprouted Seeds*, 12.

クのバード大学（Bard College）も芸術重視の方向に転換しつつあった¹⁰。主に東海岸を中心とするこうした教育的実験の動きは、南部や西部といった他地域にも広がりつつあったのである。

全人教育という高邁な理想をもったライスらの大学教員は、また同時に大恐慌の最中に仕事を失って新しい避難所を自分たちで創る必要に迫られていた。大学創設の過程で、土地、建物、資金、学生の確保は困難を極めたが、とりわけ、彼らの理想とする教育にふさわしい教員を探すのは難しかった。そんな折、芸術教育を専門とする優秀な教師を探していたライスに、「英語が全くしゃべれないが適任者がいる」とバウハウスのアルバースのことを知らせたのはニューヨーク近代美術館の学芸員フィリップ・ジョンソンだった。ナチスの政権奪取の直後にベルリンでアルバース夫妻に会い、バウハウスの閉鎖の話を聞いていたジョンソンは、彼らにアメリカ行きを勧めた。アルバースの妻アニー（Anni）はユダヤ人で、夫妻はアメリカ行きに積極的だった。ヨーゼフ・アルバースは、1920年、ヴァイマル・バウハウスが創設された翌年、ヨハネス・イッテン（Johannes Itten）の学生となり、23年からは、ヴァルター・グロピウス（Walter Gropius）の要請で手工芸を中心に予備課程の講師（1925年には教授）となっていた。グロピウスの後継者としてデッサウのバウハウスの校長となったハルネス・マイヤー（Hannes Meyer）は、公然たる共産主義者であったため、ナチスに敵視された。1932年にはデッサウのバウハウスは閉鎖され、ベルリンに移ったが、それも1933年には廃校に追い込まれた。マイヤー解任後に校長となったルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ（Ludwig Mies van der Rohe）やモホリ＝ナジ・ラースロー（Moholy-Nagy Laszlo）らもアメリカに

10 両大学については <http://www.bard.edu/about/history/> (accessed on November 20, 2011); <http://www.bennington.edu/> などを参照した。また、メアリー・マッカーシーがバード大学をモデルにして書いた『学問の森』(*The Groves of Academe*) については、拙文「知識人たちの空騒ぎ——メアリー・マッカーシーの『学問の森』」*Albion* 53 (2007) で扱っている。

亡命し、後者はシカゴにニュー・バウハウスを設立することになる。

ヨーゼフ・アルバー스는当時まだ業績も名声もなく、また英語ができないこともあって、アメリカ側の招聘大学をみつけるのにジョンソンは苦勞していた。しかし、アメリカの大学の業績主義や情操教育の輕視に不満をもっていたライスにとって、面識はなかったものの実験的美術教育に取り組んできたアルバー스는魅力的な存在だった。ライスはアルバース夫妻の招聘を二つ返事で引き受けた。他方、ノースカロライナがどこにあるのかも知らなかった夫妻は、ライスと共に大学の創設に加わった若い物理講師テオドア・ドライヤー(Theodore Dreier)の書いたドイツ語の招聘状のなかに、この大学は「パイオニア的な事業」であると書かれていることに心惹かれたという。創作と教育、そして生活が一体となった新しいコミュニティ作りという発想は、バウハウスの実験的精神にもつながるものがあると思えた。ニューヨーク近代美術館のエドワード・ウォーバーグ(Edward Warburg)やジョンソンの助力を得て、夫妻は1924年の移民法改正¹¹によって厳しくなったビザの国別割当の枠外でのアメリカ入国を許可され、1933年の感謝祭の頃にはブラック・マウンテン・カレッジの初代の教授陣に加わった¹²。皮肉にも、彼らを招聘したライスは、1940年には学長として不適任であるとされ、ブラック・マウンテン・カレッジを去ることになるが、アルバース夫妻は、1949年まで16年間の長きにわたって大学の中心的メンバーだった。ヨーゼフは抽象絵画および色彩教育の分野で、妻の

11 1924年の移民法は出身国法またはジョンソン＝リード法としても知られているが、これは暫定措置として基準の年度を1890年とし、国勢調査による国籍別外国出身者数の二パーセントを割り当てている。しかし長期的には、「出生もしくはその祖先に基づいて1920年現在アメリカに居住している実数によって国別の移民数が決定される」ことになった。この部分は、1927年7月1日に発効の予定だったが、出身国原則は議論をよび、議会は出身国条項の発効を、1928年7月、1929年7月と二度延期した。この条項は、1929年7月1日に発効した。

12 Duberman, *Black Mountain*, 41-43.

アニーは織物の指導を通して、ブラック・マウンテン・カレッジの芸術教育の発展に貢献した。しかし、1949年には、大学の運営や教育方針をめぐる内部対立が起こり、ドライヤーが学長職から解任されると、アルバース夫妻は抗議して大学を辞任した。アルバースは、1950年から58年に引退するまで、イエール大学のデザイン学部を率いることになるが、アルバースのアメリカへの長い入門儀式は、ブラック・マウンテンの山奥の「理想」の共同体で行われた。既成の大学秩序に対して異議を唱えた「不平分子」たちの避難所はまた、ナチス政権を逃れてきた亡命知識人の避難所にもなったのである。

ブラック・マウンテン・カレッジの亡命学者の中ではアルバースが最もよく知られているが、1930年代から40年代にかけてその他の多くの亡命学者がその教授陣に加わった。担当科目も、心理学、歴史、芸術、音楽、言語学、化学、物理、経済学、社会学、歴史など多岐にわたっていた。まず1935年には、アルバースのベルリン時代の知人であったドイツ人の精神分析学者フリッツ・メレンホフ（Fritz Moellenhoff）が、医者である妻アンナ（Anna）とともに赴任し、1938年まで滞在した。孤立したコミュニティであるためにノイローゼになったり自殺願望をもったりする学生もいたので、精神分析医でもあったメレンホフは、心理学を教えるとともに学生の悩みの相談役となった。同じ1935年には、ハバナ大学で教えていたキューバ人亡命者ヘルミノ・ポートル・ヴィラ（Hermينو Portell-Vila）が赴任して歴史を担当したが、他の教員と折り合いが悪く、一年で大学を去った。さらに、1936年には、バウハウスでグロピウスの弟子だったアレキサンダー・シャヴィンスキー（Alexander Schawinsky）が加わって、絵画と舞台装置の授業を行い、アルバースとともにバウハウスでの経験をアメリカに伝播する役割を果たした。彼は1938年には、モホリ＝ナジ・ラーローがシカゴに設立したニュー・バウハウスへと移っていった。心理学では、メレンホフの後任としてベルリン大学教授の心理学者エルヴィン・シュトラウス（Erwin Straus）が1938年に赴任したが、彼は政治的に保守的であり、その尊大な態度で学生に敬遠されていた。シュトラウスと対照的に、学生からも同

僚からも愛され、ブラック・マウンテン・カレッジを美術だけではなく音楽の分野で有名にしたのは、1939年に赴任したハインリッヒ・ヤロヴィッツ（Heinrich Jalowetz）だった。チェコスロバキア生まれで、ウィーン大学ではアーノルド・シェーンベルクの最初の弟子の1人だった。ヤロヴィッツはオペラの指揮者としてヨーロッパ中で活躍していたが、1933年に非アーリア人芸術家の追放でドイツを去り、ウィーンなどで活動していた。1938年のナチスによるオーストリア併合の後、1939年にアメリカに逃れ、「難民救済全国調整委員会」（National Coordinating Committee to Aid Refugees）を通してブラック・マウンテン・カレッジのことを知った。1946年に心臓麻痺で急死して大学の敷地に埋葬されたが、紛争の絶えなかった大学で常に中和剂的な役割を果たした。

第二次世界大戦開始後には、さらに多様な亡命知識人がブラック・マウンテン・カレッジをその避難場所にした。1941年に赴任したオランダ生まれのフランシス・デュ・グラフ（Frances de Graff）は、ライデン大学で文学と語学の博士号を取った才能ある女性だった。ロシア語の授業を担当したが、1930年代をソヴィエトで過ごし、ソヴィエトの教科書を授業に使ったため、共産主義的だという烙印を押されることもあった。しかし、その情熱的で学生の思考力を育てようとする姿勢は多くの学生の支持を得た。1942年には、さらに4人の亡命知識人が加わった。まず、変り種としては、マグネシウムの抽出で有名だった化学者フリッツ・ハンスギルク（Fritz Hansgirg）で、アメリカ亡命後に、ナチスのスパイであるとの疑いをかけられたが無罪であることが判明し、ブラック・マウンテン・カレッジで化学と物理を教えた。ハンスギルクはシュトラウスとともに、亡命知識人のなかの保守的な声を代表した。音楽の分野では、ドイツ生まれの指揮者でバレエ音楽の作曲家でもあったフレデリック・コーエン（Frederic Cohen）が赴任してきて、大学の夏季特別プログラムとして開催された音楽学院（Music Institute）の成功に貢献した。音楽部門を補強したもう1人の亡命者は、ロシア系ユダヤ人の両親を持ちハイデルベルク大学で哲学と音楽を学んだエドワード・ロヴィンスキー（Edward Lowinsky）だった。これに、イ

ギリス生まれの兵役拒否者で、当時政治的ラディカリズムに傾倒していたエリック・ベントリー（Eric Bentley）が、歴史および演劇科目の担当者として加わった。さらに、1944年には、有名な数学者のマックス・ヴィルヘルム・デーネ（Max Wilhelm Dehn）がブラック・マウンテン・カレッジに最後の避難所を求めた。デーネは、1938年11月の水晶の夜事件の折、逮捕され、強制収容所に送られたが、友人の判事のお陰で解放された。妻とともに、ドイツを去り、北欧諸国、ロシア、日本を経由してアメリカに辿りついたのだった。散歩と自然観察を好んで学生に愛されたデーネは、1952年に死亡、ヤロヴィッツと同じように、大学の敷地近くの山中に埋葬された¹³。

戦後になってからは、亡命者が赴任してくることは少なくなったが、共産主義者への警戒が強くなってブラック・マウンテン・カレッジに避難してきたものもいた。例えば、1946年に赴任したカール・H・ニービュル（Karl H. Niebyl）は、プラハ生まれでフランクフルト大学で博士号を得たのちアメリカにきた社会学者だったが、マルクス主義理論を教えているとして他の大学で問題となり、教育の自由を求めてやってきた。同じ年には、16歳でニューヨークにやってきたザンクト・ペテルブルク生まれの画家のイリア・ボロトフスキー（Ilya Bolotowsky）が、休暇中のアルバースの代替としてやってきた。しかし両者ともアルバースと折り合いが悪く、短い間に大学を去っている。1947年には、戦後、比較的長くブラック・マウンテン・カレッジに留まることになる、白系ロシア人亡命学者ナターシャ・ゴールドウスキー（Natasha Goldowski）が赴任した。彼女は革命でロシアを逃れパリ大学で学び、マンハッタン計画の研究者・アシスタントをしたこともあった。しかし、戦後は冷戦下で、外国生まれ、特に共産圏出身の科学者を教育・研究機関で雇用することへの規制が強まった

13 個々の亡命知識人の履歴については、Duberman, *Black Mountain*; Lane, ed., *Black Mountain College Sprouted Seeds* の他に、Mary Emma Harris, *The Arts at Black Mountain College* (Cambridge: MIT Press, 1987) を参考にした。

ため、ブラック・マウンテンに就職の場を求めたのである¹⁴。このように、戦後もしばらくは亡命知識人の存在が顕著だったが、1944年には、内部対立のためにコーエン夫妻、グラフ、ベントリーが去り、1947年にはロヴィンスキーが他大学に移り、また、1949年には最初の亡命知識人であるアルバース夫妻が去って、1950年頃を境に、建学以来続いたヨーロッパ人の影響は少なくなっていた。そして、詩人のチャールズ・オルソン（Charles Olson）の赴任によって、1950年代の半ばまで『ブラック・マウンテン・レビュー』（*Black Mountain Review*）の周辺に集まった「ブラック・マウンテン派の詩人たち」が活躍する時期を迎えるが、1956年には資金不足と学生不足のため、大学は閉校となった。

このように大恐慌の最中に、ノースカロライナの山中のエデン湖のほとりに出現したブラック・マウンテン・カレッジは、ナチスを逃れてアメリカにやってきたヨーロッパ各地の学者の避難所、そして、既成秩序や教育体制に疑問をもつ異端的なアメリカ人の避難所としての役割を1950年代半ばに終えることになる。それは、ナチズムのヨーロッパ全域への拡大、第二次世界大戦の勃発、アメリカの参戦という外側からの大きな嵐を逃れて亡命知識人たちが羽を休めた文字通りの避難所であったとともに、全人教育という理想を掲げ、芸術、自然科学、人文・社会科学の統合をめざす理想の教育的実験の現場でもあった。それでは、こうした実験的教育機関は、人種差別という南部の現実にどのように向かい合ったのだろうか。そして、自らもナチスの人種差別政策あるいは思想的迫害を逃れてアメリカにきた亡命知識人たちは、その中でどのような立場をとったのだろうか。以下、次節でこのことを考えてみたい。

14 赤狩りの標的にあった学者が南部の大学に赴任するようになったことに関しては、例えば、Ellen W. Schrecker, *No Ivory Tower: McCarthyism and the Universities* (New York: Oxford University Press, 1986), 289に言及されている。

2. ジム・クロウ法とブラック・マウンテン・カレッジ

『ブラック・マウンテン：コミュニティを求めて』(*Black Mountain: An Exploration in Community*)の著者マーティン・デュバーマン(Martin Duberman)によれば、ブラック・マウンテン・カレッジに、白人の教育施設を黒人が使用してはいけないという南部の慣習に従うか否かが問われたのは、大学が発足した年1933年のことだったという。この大学で英語を教えていた女性教員の父親チャールズ・テンブルマン・ローラム(Charles Templeman Loram)は、1931年からイェール大学の人種関係学部(1940年のローラムの死後、閉鎖)の学部長をしていた。黒人の教育状態の視察旅行のため南部を訪れ、娘のいるブラック・マウンテン・カレッジにも立ち寄ることになっていた。彼には大学院生が同行することになっていたが、その1人が黒人学生だった。教授会では、地元の慣習を破って黒人学生を白人学生と同じ寮に泊まらせるべきかをめぐって意見が分かれた。学生たちは黒人学生を同等に扱うべきだと主張したが、教授の何人かは、「人種統合実現のために一撃を放つよりも大学の生き残りを優先すべきである」との見解を表明した。大学関係者は、「地元の人々がブラック・マウンテン・カレッジを自由恋愛と共産主義の避難所として不信の眼で見て」おり、これに加えて『『黒人びいき』("nigger-lovers")のレッテルを貼られることは、反キリスト(教)の三位一体を完成させることになり、この原理主義的な地域で、それは文字通り大学コミュニティが焼き討ちにあうことを意味する』¹⁵という不安を抱いていた。会議に先立って大学側は地元の意見を非公式に探っていたが、入ってくる情報は、こうした不安を裏付けるものだった。

結局、南部出身の学生が極めて少ないなかで、唯一人の地元出身(白人)学生の父親が、黒人コミュニティの中でしかるべき黒人学生用の宿泊先をみつける手配をするという妥協案でこの一件は落着いた。この時点での唯一の亡命学

15 Duberman, *Black Mountain*, 67.

者はアルバース夫妻だけであったが、彼らがこの件にどのような反応を示したかということにデュバーマンは触れていない。しかし、後述する黒人学生入学をめぐる 1940 年代の論争で、アルバース夫妻は消極論を唱えたことを考えると、少なくとも彼らが、南部の慣習を破るべきだとの意見を主張したとは思えない。デュバーマンは当時のアメリカの反ユダヤ主義的傾向については扱っていないが、南部のキリスト教原理主義的風土の中では、共産主義、自由恋愛、「黒人びいき」が攻撃目標になっただけではなく、反キリスト（キリスト殺し）のシンボルとしてのユダヤ人もまた標的になることがあった¹⁶。ナチスを逃れてアメリカにきた知識人の多くがユダヤ系であるとき、人種隔離政策に反対して地元民と敵対することで、ドイツでの悪夢が再現することを恐れた者もいたことは想像がつく。一方で、次節で詳しく扱う『カギ十字からジム・クロウへ：黒人大学における亡命学者たち』（*From Swastika to Jim Crow: Refugee Scholars at Black Colleges*）の著者ガブリエル・サイモン・エジコム（Gabrielle Simon Edgcomb）が示唆するように、ナチスの人種政策に反対した多くの亡命知識人、とりわけユダヤ系知識人は、南部で隔離政策の犠牲となっていた黒人の運命に共感を抱く傾向があったことも事実であろう。人種統合か隔離かをめぐる議論のなかで、様々な背景や考え方をもつ亡命知識人の対応が一樣ではなかったことは、1940 年代に起こった黒人学生の入学許可をめぐる紛争にも表れている。

デュバーマンによれば、ブラック・マウンテン・カレッジの人種問題に関する態度は、「南部の基準に照らしてみれば、リベラルであった」という。その

16 アメリカ社会とくに南部における反ユダヤ主義については、John Higham, *Strangers in the Land: Patterns of American Nativism, 1860-1925*, 2nd. ed. (New Brunswick: Rutgers University Press, 1988); David M. Chalmers, *Hooded Americanism: The History of the Ku Klux Klan*, 3rd ed. (Durham: Duke University Press, 1987); Richard Hofstadter, *Anti-Intellectualism in America* (New York: Alfred A. Knopf, 1963) などが参考になる。

例として、1942年、67歳の白人女性を襲ったかどで死刑宣告を受けた黒人ウィリアム・ウェルマンへの判決に抗議する声明をノースカロライナ知事に送ったことで、「黒人びいきの避難所」という大学の「悪名」をいや増したことがあげられている。また、1943年には、黒人歴史週間を祝うプログラムの一貫として、「ニグロ中等教育研究所長」のW・A・ロビンソンの講演や黒人大学ハンプトン学院についての映画上映を行ったりした¹⁷。しかし、判決をめぐる見解表明や啓蒙活動からさらに踏み込んで、ブラック・マウンテン・カレッジが黒人学生を受け入れるべきか否かという問題は、賛否両論に分かれた。黒人学生受け入れに積極的だったのは、主に1940年代に新しく教授陣に加わった比較的若い教員で、その議論の口火を切ったのは1943年に赴任して政治学を教えたアメリカ人教員クラーク・フォアマン（Clarke Foreman）だった。フォアマンは、1930年代にニュー・ディールの下、ハロルド・イッキーズ率いるPWA（公共事業局）で働いたことがあり、1944年には、人種関係改善に熱心な「人類福祉のための南部会議」（Southern Conference for Human Welfare）の会長となった。その理事会がブラック・マウンテン・カレッジで開かれたとき、この大学は黒人学生を受け入れるべきではないかという意見が出た。この案を教授会で提案したフォアマンに対して、法や南部の慣習という観点から、反対意見あるいは慎重論が出された。フォアマンの友人の法律家が法的問題を調査した結果、ノースカロライナの法律では、高等教育に関する限り、人種隔離を定めた法律はないことがわかり、少なくとも法的障壁はないことを報告した。さらに、ナッシュビルにあるフィスク大学（Fisk University）から二人の黒人学生と黒人教授が大学を訪れたときに、「白人の学生と同じ寮に泊まったが問題はなかったこと」を指摘した。しかし、反対派は、「法的障壁がないにしても、南

17 Duberman, *Black Mountain*, 174-75. 黒人学生受け入れの論争については、デュバーマンの本のchapter 7を主に参考にし、それにHarris, *The Arts at Black Mountain College*に散見される情報を加えた。

部での人種偏見があまりにも強いので、人種統合はこの大学コミュニティの生存を危うくすると反論」¹⁸した。

このとき、亡命知識人の中で、人種統合賛成派に回ったのが、音楽家のヤロヴィッツとコーエン、ロシア語を教えたグラフ、それにイギリス人のベントリーだった。アメリカ人では、人類学者のポール・ラディン（Paul Radin）が賛成した。他方、アルバース夫妻、心理学者シュトラウス、化学者のハンスギルクは反対にまわり、何人かのアメリカ人がこれに同調した。デュバーマンは、急激な人種統合に踏み切ること大学が危機に瀕することを警戒したのは「他に行き場のない中年の亡命知識人」¹⁹だったと指摘するが、例えば 1949 年の辞任後にアルバースはイェール大学に招聘されていることを考えると、経済的保身だけが反対した理由ではなかったのかもしれない。デュバーマンは、アルバースが近代美術館の友人にあてた 1944 年 4 月 25 日の手紙を註で引用している。その中でアルバースは、「おこりうる軋轢と衝突をなくす為に、私の意見では、どうしても必要とはいわないが、黒人と同時に、赤色そして黄色人種の学生たち、何人かのインディアン、中国人、日本人の学生なども入学させたらいいのではないか。こういうことがなされたならば、我々の行為は人種偏見に反対しているようには見えないであろうし、我々の行為は攻撃的要素をなくすであろう」²⁰と書いている。アルバースの見解は、人種に関係なく教育の機会を与えろという平等主義とも取れるが、同時に、南部のジム・クロウ法に公然と挑戦して地元のアメリカ人の反発を買うことを恐れる心情も読み取れる。一方、シュトラウスの場合は、デュバーマンがやはり註で引用している 1944 年 4 月 17 日の議事録での発言で、「黒人に関して、我々が直面しなければならない決定的なことがある。すなわち、黒人は明らかに奇妙であり、我々は全ておなじ人

18 Ibid., 181, 180.

19 Ibid., 180.

20 Ibid., 490.

間であるというような公式は単純すぎる」と述べ、また、「我々は黒人より優れているというつもりはないが、明らかな相違がある」として、「大学はこうしたことに変化をもたらす場所だとは思わない」²¹ という見解を述べている。アルバースの意見は、文化的多様性の確保を教育上大切だと考えながらも、南部的な文化と価値観を急激に変えることは難しいというドライヤーなどの「進歩的」アメリカ人同僚に近かったのかもしれない。それに対して、シュトラウスの意見は、当時の南部の保守的な白人層の考え方に比較的似ていたと思われる。いずれにせよ、比較的若い亡命知識人が、ニューディーラーのフォアマンに同調して、人種隔離に風穴を開けようとしたのに対して、古い世代の亡命知識人は、文明化された白人とそれ以外の人種の境界線があるとの意識のためか、あるいは人種的偏見をもった集団の憎悪の恐ろしさを実感していたためか、急激な人種統合に反対の立場をとったのである。

結果として生まれた妥協案は、1人から3人までの特に選ばれた黒人学生をビジターとして3週か4週を越えない期間受け入れ、一方全大学で人種関係に関するコースを用意するというものだった。結局、1人の年配の黒人女性が夏季の特別コースに参加することが許されただけだった。この妥協を人種統合推進派だったベントリーは、特権的な例外を与えられたユダヤ人に使われる「宮廷ユダヤ人」(Hofjude)扱いとよび、アルバースやシュトラウスのように「人種主義からの避難民であった」亡命知識人が南部の人種問題に関して保守的な姿勢をとったことを皮肉ったという²²。他方、人種統合に賛成しなかったアルバースやその他の教員は、推進派のベントリー、グラフ、フォアマンを、大学を内側から壊す共産主義者ではないかとして非難したという。メリー・エマ・ハリスは、「共産黨員であったハネス・マイヤーがバウハウスの所長であっ

21 Ibid., 489.

22 Ibid., 184.

たときに、自分も政治的イデオロギーによる抑圧を経験したアルバースは、大学コミュニティのなかでの共産党細胞の形成に恐怖を抱き、常に共産主義者である疑いのある人間に警戒の眼をむけていた」²³と指摘している。共産主義者と「黒人びいき」の避難所として保守的な南部社会から敵視された「進歩的」なブラック・マウンテン・カレッジの中で、人種統合の「アジテーション」は、共産主義者が一つの教育機関を乗っ取るための手段かもしれないという疑心暗鬼が渦巻き、その渦中に、自らもナチスの人種差別政策の犠牲者であった亡命知識人がいたのは皮肉なことであった。

この黒人学生受け入れをめぐる紛争には、もう一つやや喜劇的だが笑えないエピソードがある。消極的な妥協案が成立したあと夏休みに入り、二人の女子学生が、その夏を黒人大学のフィスクで教えていたベントリーを訪ねてナッシュビルまで行った。その帰り、ヒッチハイク中に警察に捕まり、南部では「売春」を意味する loitering の罪で逮捕された。有罪判決が出て、地元の新聞は、「ブラック・マウンテン・カレッジの女子学生売春で捕まる」と報道した。結局、大学関係者が彼女らを引き取って事なきをえたが、1人の女子学生は休学処分を不服として大学を去り²⁴、彼女のアドバイザーであったグラフが実質的な辞職勧告を受けた。こうして、1944年の黒人学生受け入れをめぐる一連の紛争は、統合賛成派だったフォアマン、ベントリー、コーエンがグラフへの処分に抗議して辞職することで幕を閉じたのである。

しかし、ここで人種統合の動きが完全に頓挫したわけではない。前節で言及した1942年赴任のロシア系ユダヤ人音楽家のエドワード・ロヴィンスキーが人種統合の方向に動き出した。彼は音楽の理論家であるが、ハイデルベルク大学ではヤスパースの下で哲学を学んだこともある幅広い教養の持ち主だった。

23 Harris, *The Arts at Black Mountain College*, 54.

24 Duberman, *Black Mountain*, 186-191.

彼は、1944年の人種統合問題では留保、グラフ処分問題では処分に賛成して保守的と見られていたが、個人的にうまがあわなかった「反逆者たち」が去った後でこの問題に積極的に取り組んだ。ブラック・マウンテン・カレッジを訪れたことのあるフィスク大学の黒人教授ジョージ・レッド（George Redd）博士を通じて、南部の「黒人大学」の教員と連絡を取り始めた。1945年にはロヴィンスキーは、ハワード大学の学長に手紙を書き、「我々の大学には黒人教員あるいは客員教授をとる用意がある」と説明した。さらに夏の音楽院には黒人声楽家ローランド・ヘイズ（Roland Hayes）とキャロル・ブライス（Carol Brice）がゲストに招かれ、地元民を含めた観客を集めた。1945年の秋学期には最初の正規の黒人学生が入学、またヴァージニア州立大学のパーシー・H・ベーカー（Percy H. Baker）が初めての黒人の客員教員として招かれ、生物学を教えた。1947年には帰還兵を含めた5人の黒人学生が入学している。しかし、1947年にロヴィンスキーが大学を去ると、人種統合のために積極的に行動する教員はおらず、「ブラック・マウンテンのキャンパスで黒人をみかけることはほとんどなくなった」²⁵という。ユダヤ系亡命人であったロヴィンスキーがこのような積極的に黒人学生入学のために活動したことは、一面ではナチスによるユダヤ人差別と、南部における黒人差別にある種の共通点を見て、それを正すことに使命感を感じたといえるかもしれない。さらに、具体的に黒人大学の教員と連絡を取り、黒人の音楽家と専門家同士として語り合うなかで、「差別的な政策によって、この国の人的資質がどれだけ無駄にされているかを実感し」²⁶、人種統合の必要性を痛感したともいえるだろう。またアメリカ参戦後、自由と

25 Ibid., 217. ロヴィンスキーの人種統合への取り組みについては、Duberman, 214-218; Harris, 111を参照されたい。ハリスによれば、1947年の春にフリーダム・ライダーが州際交通機関の人種隔離に反対して、ノースカロライナ州の西部を通過したとき、ブラック・マウンテン・カレッジに泊まったという。

26 Ibid., 215.

民主主義は、人種差別的で独裁的なナチス政権に対抗する愛国的なスローガンとなり、自国内の人種差別は是正すべき汚点だという意識が強まったことが、白人教育機関への黒人の受け入れを後押ししたという背景もあろう。戦後には、日系人強制収容所を出たあと大学に入り、さらにブラック・マウンテンでアルバースの教えを受け、その後美術の世界で活躍したルース・アサワ（Ruth Asawa）などの卒業生もいる。ある意味では、ブラック・マウンテン・カレッジは、ヨーロッパ人とアメリカ人の教授陣、さらには人種的少数派を交えた学生たちからなる文化的に多様な人々の共生の可能性を探る実験であったといえるかもしれない。しかしこのような実験的で進歩的といわれる大学であっても、そして、ヒトラーの人種差別政策に批判的であった亡命知識人にとっても、南部のジム・クロウ法に正面から挑戦することは、多くの精神的負荷を強いるものだったのである。それでは、ハワード大学やフィスク大学のようないわゆる「黒人大学」で教えた亡命知識人はどのようなことを考え、行動したのであろうか。このことを次節でみてみよう。

3. 「黒人大学」での経験

『かぎ十字からジム・クロウへ』の中でエジコムは、1930年代から40年代にかけてナチスを逃れてアメリカにきた亡命知識人の中で、南部の「黒人大学」で教えた51名の軌跡を辿った。現在歴史的な「黒人大学」とされている約百校のうち、16校の私立大学と3校の公立大学が、この中に含まれている。確認できた亡命学者が比較的多かったのは、ワシントンDCのハワード大学（Howard University）の13人、ヴァージニア州のハンプトン学院（Hampton Institute（改名して現在は Hampton University））の9人、テネシー州ナッシュビルのフィスク大学の5人などである。この調査でもっとも赴任の時期が早かったのは、1935年にルイジアナ州ニューオーリンズのザビエール大学（Xavier University）の社会福祉学部の学部長だったキャサリン・ラトケ（Katherine

Radke) であるが、彼女については「ニューオーリンズ市が生活保護費を打ち切ると決定したときに、全米黒人地位向上委員会に抗議をするように働きかける手紙を書いた」²⁷ という以外には、詳しいことはわかっていない。51名のうち1930年代に赴任したのは僅かであり、ほとんどが1940年代に赴任している。前にも触れたように、南部に亡命知識人を配置することに援助団体は躊躇する傾向があった。すでに1934年にハーワード大学の学部長から外国人亡命学者支援グループに対して亡命学者についての問い合わせがあったが、実際に配置されたのは数年後であり、フィスク、ハンプトン、ショー (Shaw)、タラデガー (Talladega)、スペルマン (Spelman)、タスキギー (Tuskegee)、ベネット (Bennett) などの黒人大学の総長に「亡命外国人学者緊急援助委員会」(Emergency Committee in Aid of Displaced Foreign Scholars) から「ナチスの政策の犠牲者で、アメリカの自由と民主主義を高く評価しており、すでにアメリカ市民権を取る手続きを始めたか、あるいはすでに市民になっている候補者」²⁸ の配置の照会が正式になされたのは1941年のことだった。エジコムは、援助組織が亡命学者の就職先として黒人大学を除外する傾向があった理由として、3点をあげている。第一に、財団などからの寄付の受け入れ先の大学は、亡命学者の給料の半額を負担する義務があったが、黒人大学はどこも財政的に厳しい状態にあったこと、第二に、黒人大学の多くは南部大学協会のメンバーとなっておらず、大学としての正式な認証 (accreditation) を受けていなかったこと、そして第三に、黒人大学への就職は経歴に致命的であるとの見方が支配的であったことだった²⁹。1955年にジョージア州のペイン・カレッジ (Paine College) に就職した亡命人類学者サイモン・メッスィング (Simon D. Messing) は、年配の

27 Gabrielle Simon Edgcomb, *From Swastika to Jim Crow: Refugee Scholars at Black Colleges* (Malabar, Florida: Krieger Publishing Company, 1993), 86.

28 Ibid., 26.

29 Ibid., 41-42.

亡命学者から「黒人大学の亡命教授だというレッテルを永久に貼られることになる」との忠告を受けたという³⁰。

黒人大学で教えた経験についての亡命知識人自身の語りは、当然ながら一様ではない。「亡命外国人学者緊急援助委員会」が無記名で行ったアンケートで、ある南部の黒人大学で教えた亡命学者は、次のように述べている。

私は、アメリカの黒人と一緒に学び、住むことができて幸せだった。教授陣、事務機関、学生たちは非常に気持ちのよい人たちだった。私は長く続く友情を結ぶことができた。教授陣は、国際的な背景をもった優秀な学者で構成されていた。真の学問への関心は勇気を与えてくれるものであり、人種的少数派の問題を理解できたことは心休まることであった。強調するまでもないが、人種、信条、肌の色からくる摩擦や誤解は全くなかった³¹。

それでは、エジコムが直接的、間接的に接触できた亡命知識人の南部体験とはどのようなものだったのか。

ここでは、エジコムの調査に依拠しながら、南部の黒人大学で教えた三人の亡命知識人に焦点をあてていきたいと思う。まず、ノースカロライナ州のノースカロライナ・セントラル大学（North Carolina Central University）で1939年から1973年までドイツ語、ラテン語、哲学を教えたモーリッツ・マナッセ（Moritz Manasse）の場合をみてみよう。彼はナチスによる学者追放が始まった1933年の11月にハイデルベルク大学から博士号を得たが、夫婦ともにユダヤ人でありアメリカに亡命した。この大学に就職した経緯は述べられてないが、恐らくは博士号を取ったばかりの若くて無名の学徒であることで、優秀な学者

30 Ibid., 42, 100.

31 Stephen Duggan and Betty Drury, *The Rescue of Science and Learning: The Story of the Emergency Committee in Aid of Displaced Foreign Scholars* (New York: Macmillan Company, 1948), 140.

に的を絞ってアメリカ各地の主要な大学に配置していた援助団体の候補リストからは落ちたと思われる。彼は比較的率直に、「誰も面と向かってはいわなかったが、黒人大学に就職するのは黒人のレベルに身を置くことで、白人の大学で教えるほど優れていないからだという態度が感じられた」と述べ、彼の息子もまた子供時代を振り返って、「僕は両親がユダヤ人であること、強いドイツなまりがあること、そして黒人大学で働いていることで恥ずかしい思いをしていた」と書いている³²。序文でジョン・ホープ・フランクリン (John Hope Franklin) は、「新しく自分の故郷になった場所、自由の地、勇気ある者たちの地だと信じてやってきた国で遭遇した偏見を語ることの個人的痛み」に言及しているが³³、マナッセはインタビューの中で、彼の家族が感じていた様々なレベルでの疎外感を次のように表現している。「私たちはお互いに言い合ったものだ。『偏見のために僕たちは孤立している。僕たちはドイツ人だ、よりもよって第二次世界大戦の最中にね。僕たちはユダヤ人だ。そして僕たちの家には黒人がやってくるし、それに金もないしね。』」³⁴と。さらに彼は、自分たちの家族が、地元のユダヤ人コミュニティからも疎外されていたことを示唆している。キリスト教徒が主流のアメリカに点在するユダヤ人コミュニティは、伝統的な宗教的戒律を比較的忠実に守ってきたといわれる。それに対して世俗化されたドイツのユダヤ人は、ドイツ的な生活様式を身に着けていた。例えば、マナッセ夫妻はユダヤ人だったが、ドイツでは、妻はキリスト教徒として育てられたし、自分の父親もユダヤ教とキリスト教の祭日を両方祝っていたという。ノースカロライナに来て、家にクリスマス・ツリーを飾っていたところ、訪ねてきた地元のユダヤ人ラビが憤慨して帰ってしまったエピソードも伝えている。息子は、豚肉を食べてはいけないことを知らないなど、ユダヤ教の戒律にまったく無知だっ

32 Edgcomb, *From Swastika to Jim Crow*, 67, 69.

33 John Hope Franklin, "Foreword," *From Swastika to Jim Crow*, ix.

34 Edgcomb, *From Swastika to Jim Crow*, 67.

た子供時代を振り返る³⁵。ユダヤ系であっても必ずしも宗教的なユダヤ教徒ではなかったドイツからの亡命知識人と、ユダヤ人コミュニティに住むユダヤ系アメリカ人とでは、その生活様式や価値観に差異があった。厳格なユダヤ教の規律を守っていたユダヤ系アメリカ人は、亡命知識人家族の自由な生活様式に違和感を覚えたのであろう。さらに、1920年代の第二波クー・クラックス・クランが反ユダヤ主義的感情を煽った記憶から、南部の数少ないユダヤ人は、南部のジム・クロウ法で定められたカラー・ラインを超えないように慎重な態度をとっていたと想像される。マナッセの息子は、正義感の強かった母親が妊娠中の黒人女性に席を譲ってあげたところ、白人運転手からバスを降りるように強要されたというエピソードも伝え、「人種主義はあまりにも広く行き渡っていたので、両親でさえもそれを本当に理解していたとは思わない」³⁶と述べている。

マナッセはまた、1967年頃に黒人問題についてのコースを提供するように大学から言われ、マーティン・ルーサー・キング、マルコム X、フランツ・ファノン、ストークリー・カーマイケルなどの著書を使いながらブラック・パワーに関する講義を行ったが、学生のなかの過激派と穏健派の争いが起こったことも語っている。人種隔離の厳しい時代から公民権運動、ブラック・パワーの時代を経験した一人の亡命知識人の苦勞が偲ばれる。息子は、「父は、比較的貧しい黒人大学にいて沢山の授業を担当する教授とは本当は違ったタイプの学者だった。だから、彼の本当のライフワークは、そうした〔知的な〕発展という意味では、実りあるものではなかった」と述べている。なぜ、「他の場所に行こうとしなかったのか」について、息子は「彼は本当にこの大学が彼の命、そして彼の家族の命を救ってくれたと感じていた。だからこの大学に対して忠誠

35 Ibid., 67, 70.

36 Ibid., 71.

心をもっていたのだと思う』³⁷と答えているのは印象深い。マナッセは1943年頃、宗教哲学南部学会の会員になっているが、新しい黒人メンバーとしてユニオン神学大学院出身の黒人の同僚を推薦したが、学会幹部から反対され、学会書記に自分もメンバーを辞めると手紙を出した。結局、この黒人メンバーは学会への入会を許可された。人種隔離された南部の町で黒人大学に勤め、孤立感に襲われながら、34年間も自分なりの生き方を貫いたマナッセのような亡命学者は、亡命知識人の歴史を彩るような顕著な業績を残したとはいえないが、移住先の社会に静かな変化を引き起こしたといえるかもしれない。

それでは、次に学生の記憶のなかで生き続けている二人の亡命学者のことを見てみたいと思う。1人は、ヴァージニア州のハンプトン学院で1939年から46年まで芸術を教えたヴィクター・ローヴェンフェルト（Viktor Lowenfeld）である。ローヴェンフェルトはオーストリア出身のユダヤ人であるという以外にはアメリカにきた詳しい経過はわからないが、1938年のナチスによるオーストリア併合の翌年に赴任していることから、亡命知識人仲間のネットワークを使っただけか、あるいは、援助団体の紹介があって、ハンプトン学院にきたと思われる。南部の公立の黒人大学のカリキュラムが比較的職業訓練的なものに偏向していたなかで、ハンプトン学院のような私立大学は、リベラル・アーツを重視する傾向があった。ハンプトン学院は、古くからの黒人大学として、ユダヤ人事業家で博愛家のジュリアス・ローゼンヴァルト（Julius Rosenwald）が創設した財団から、多額の寄付を受けてきた。この財団は、特に南部の黒人大学への資金援助、および黒人の芸術家などを支援するフェローシップを1920年代から40年代まで出してきた。デーヴィッド・ルイスによれば、黒人の公民権回復と差別の是正を、ユダヤ系博愛事業家は潜在的な反ユダヤ主義的感情を払拭するうえでも重要な課題だと考えていた。ユダヤ人がハリウッドやブロードウェイで活躍し、『ニューヨーク・タイムズ』などマス・メディアでも活躍す

37 Ibid., 71-72.

ることで上昇していった例にならい、美術、舞台芸術、音楽、文学の分野で黒人の才能を伸ばし、そのことを黒人差別解消の足がかりにすることを考えたとルイスは説明している³⁸。ルイスの論文は特に 1930 年代後半の状況には触れていないが、こうしたユダヤ系博愛団体はまた、ユダヤ系難民、特に亡命知識人の救済に熱心であった。したがって、自分たちの支援する黒人大学に他に職のないユダヤ系亡命学者を配置することで、二つの目的——困窮する亡命学者に生活の糧を与えることと黒人大学の教育の質を高めること——を達成しようとしたことは十分に考えられる。こうした財団や理事会の意図は、黒人を白人並みに「文明化」することで同化を進めることであり、基本的に体制維持的な意図をもっていたのかもしれない。しかし、黒人大学で教えた亡命学者が時には財団などの財政的恩恵を受けたにしても、彼らを与えた影響が必ずしも体制維持に寄与するものであったわけではない。むしろ亡命知識人の存在は、黒人学生の意識ないしはその行動に変化をもたらすこともあった。

ヴィクター・ローヴェンフェルトについて、1941 年に入学し、彼の学生だった壁画家のジョン・ビガーズ (John Biggers) が、次のような言葉を残している。

あの特別な時代のアメリカ南部に暮らしていた僕の家族や周りの人々は、アフリカ系アメリカ人に対する差別的な法律のために、本当に窮屈な生活を送っていた。だから、自分の個性を伸ばし発展させるために、黒人の子供たちは入り口を捜していたんだ。それでヴィクターがこの夜間コースを教えたときに受講したのだが、彼は、いわゆる「自己表現」という視点から僕たちのクラスを指導しようとした。ここでは、人生についてどのように感じていたかについて、そして個人的な苛立ちの感情について、何かをいう突破口があったのだ。そして彼の哲学は、芸術的表現の前にまず自己表現があるということだった³⁹。

38 David Levering Lewis, "Parallels and Divergences: Assimilationist Strategies of Afro-American and Jewish Elites from 1910 to the Early 1930s," *The Journal of American History* 71 (December 1984): 543–64.

39 Edgcomb, *From Swastika to Jim Crow*, 97.

ビガーズによれば、「自分が会ったことのある白人のアメリカ人とはまったく違っていた」ローヴェンフェルトは二つの点で批判されたという。一つは、黒人と白人の学生が共に学ぶ、人種の境界を越えたワークショップをしたこと、もう一つは綺麗な風景や花を描くかわりに「自己表現」を重んじる芸術を教えたことだった。例えばビガーズがまず表現しようとしたのは、南部の田舎から北部への黒人の大移動、その大きなうねりの感覚だった。ハンプトン学院には古くからの白人の教授陣とその子供世代からなる白人コミュニティがあって、南部の人種隔離政策に忠実に従っていたが、その中で南部の習慣を当然とは考えていないアウトサイダーとしての亡命知識人の存在は、「非常に豊かな変化を学生の間にもたらした」と、彼は当時を回想している⁴⁰。

ビガーズは、学生たちを感動させたのは、ローヴェンフェルトが「完璧なるヒューマニスト」であったこと、「歴史家であり、人文学者であり、画家、音楽家、詩人であったこと」だという。ベートーヴェンやバッハといったヨーロッパの音楽の巨匠に自分たちを誘ってくれたこと、同時にジャズやゴスペルについて学ぼうとして双方向的な学習が成立したという。美術に関しても、アフリカ芸術がヨーロッパの現代芸術に与えた影響について熱っぽく語り、「自分たちの文化のなかで黒は惨めで、邪まで、悪魔的なものを代表しているのに、こういう美しく輝く黒色の造形物の深遠なる意味と人間的な伝統」について自分たちの意識を目覚めさせてくれたという⁴¹。

壁画家として成功したビガーズが恩師の影響力をかくも高く評価していることは、最初に引用した箇所にもあったように、当時の南部の状況が、自分を表現して成長していきたいと考える南部の黒人にとって、いかに抑圧的なものだったかを語っている。ビガーズは、ローヴェンフェルトがオーストリアおよびアメリカで視覚障害者を教えた経験があったことに触れて、ユダヤ系であった恩

40 Ibid., 98-99.

41 Ibid., 98.

師が、生まれつき社会的に不利な立場に置かれた人々に共感を覚えていたことを示唆する。そして、彼がハンプトン学院を赴任先に選んだのは、「アフリカ系アメリカ人は社会的にハンディキャップを負っており、彼が自分の祖国での苦い経験に思いを馳せるとき、自分たちと我々との間に共通点を見たからだ」と述べている⁴²。ローヴェンフェルト自身は自己の経験を語っていないので、ビガーズの眼に映った恩師の肖像とその心情は、ある意味でビガーズ自身の心のなかを語っているものなのかもしれない。しかし、ローヴェンフェルトに資金を提供し、黒人大学に招いた財団や理事会の意図がいかなるものであったにせよ、この亡命知識人が南部の一人の黒人の意識に変革をもたらし、その人生に大きな変化をもたらしたことは確かであろう。

それでは次に、芸術を通してではなく、社会科学を通して、別の形で学生に影響を与えたエルンスト・ボリンスキー（Ernst Borinski）の場合をみてみよう。彼は、ミシシッピ州ジャクソンにある私立の黒人大学トゥガルー・カレッジ（Tougaloo College）で、1947年から83年まで社会学、ドイツ語、ロシア語を教えた。ボリンスキーは、ポーランドとの国境に近い町で生まれたユダヤ系ドイツ人で、ポーランド語、ドイツ語、ロシア語、イディッシュ語を話す多言語的な環境で育った。ハレ、ベルリン、ミュンヘンの大学で、法律と芸術を学び、後に社会民主党员となって労働組合運動を指導したという。1936年にアメリカ行きの旅行ビザを取得、1938年のオーストリア併合の後にドイツを離れ、1939年にアメリカに到着した。それから1949年にトゥガルー・カレッジに来るまでの経歴は定かではない。

芸術の教師としてのローヴェンフェルトの場合、自己表現を通して創作者およびそれを受容する人々の意識の変革を促したが、ボリンスキーは、社会科学を通じて、学生たちの意識を自分たちの置かれた現実に向けさせ、現実を理解し、変えていくための理論的および実践的な道標を与えたといえるかもしれな

42 Ibid.

い。彼は、社会学実験室とセミナーを使って黒人と白人、活動家と学生、大学と地域社会を結び付ける働きをして、ジャクソンの公民権運動の活性化に一役買ったと同時に、多くの卒業生を有名な大学院に送り、博士号を取らせることで、アカデミックな世界で活躍するアフリカ系アメリカ人を数多く育成した。活動家と学者の両方が巣立っていったことは、もちろん彼一人の力でできたことではなく、その役割を誇張することは慎まなければならないだろう。しかし、彼自身の背景が労働組合活動家であり、同時に学問の徒であったことが、実践と理論の統合を重んじる姿勢を生み出したのではないかと思う。

1961年の9月にトュガルー大学の三年生に編入した公民権活動家アン・ムーディー（Anne Moody）の自叙伝『貧困と怒りのアメリカ南部』（原題 *Coming of Age in Mississippi*）を読むと、この南部の小さな黒人大学が、ミシシッピの公民権運動のなかで大きな役割を果たしたことがわかる。例えば、1961年3月27日、トュガルー大学の学生9人が白人専用のジャクソン市立図書館を使用して逮捕されたり、同じ頃活動家のメドガー・エヴァーズの講演会がキャンパスで開かれたりしている⁴³。ボリンスキーの「個人的履歴」によれば、彼は、ミシシッピ州あるいは南部全体が、「ジム・クロウ」様式からアメリカ憲法の諸原則に基づいた現代社会へと変化していく上で、トュガルー大学の社会科学部門が中心的役割を果たすことを望んでいた。例えば、彼が開いた社会科学フォーラムは、「ミシシッピ州で唯一、黒人と白人が一緒に作家のジェイムズ・ボールドウィン、社会学者のデイヴィッド・リースマン、歌手のピート・シーガーの話を聞くことの出来る機会」を提供したという⁴⁴。ミシシッピ州で最も戦闘的な白人の公民権活動家の一人で、ミルサップス・カレッジ（Millsaps College）で1954年にボリンスキーに会ったというエドワード・キン

43 アン・ムーディー著 樋口映美訳『貧困と怒りのアメリカ南部』（彩流社、2008）の特に第20章と年表が参考になる。

44 Edgcomb, *From Swastika to Jim Crow*, 123.

グ牧師は、「彼は外国人であること、そのアウトサイダー的な要素を武器にして、黒人と白人は同席してはいけないというような人種関係のエチケットを破ってしまうことで、考えられないほど沢山の人たちと手をつなぐことができた」と述べている⁴⁵。

家族もなく、「過去もない」人間としての亡命知識人ボリンスキーは、常に「一匹狼」だったという。マナッセが亡命知識人の何重もの疎外感がある種の諦観をもって表現したとしたら、ボリンスキーは、その疎外感を「積極的な周縁性」(positive marginality)と呼んだ。エジコムは、1983年にボリンスキーが他界したときに、アメリカ社会学学会のニュースレターに載った弔辞から、ボリンスキー自身の次のような言葉を引用している。

私はこの他者性ということを十分に意識してミシシッピーにやってきた。他者であることは私の烙印であると強く感じてきた。私は、文化的に、態度や行動において、そして人種的にも言語的にも烙印を押されていると感じてきた。そして私は押された烙印をうまく用いようと、また他者性と積極的に向き合おうと決心したのだ⁴⁶。

彼が、黒人と白人が対立するコミュニティの中で、いわば第三者的な仲介者、あるいは様々な対立する意見から新しい統合を生み出していくうえでの触媒的機能を果たそうとしたことは興味深い。しかし、ボリンスキーの周縁性は積極的な武器にもなったが、あるときにはリスクでもありえた。ミシシッピーの州議会は、1957年に彼を「トゥガルーのあのラディカルな白人教授」として非難したし、彼はたびたび外国人や共産主義者として攻撃されたという⁴⁷。現実には彼の思想は、対話と実験、そして異質なものの遭遇のなかから批判的に考える力を育てていきたいという方向だったのではないかと思う。ローヴェンフェ

45 Ibid., 121.

46 Ibid., 128.

47 Ibid., 124.

ルトが、芸術を通して南部の黒人の意識を変えていったとしたら、ポリンスキーもまたその社会学実験室を通じて、南部の現実になんらかの変化をもたらしたといえるのではないだろうか。

結語にかえて

本論文では、1930年代から1940年代にかけてアメリカ南部で教えた亡命学者について論じてきた。ブラック・マウンテン・カレッジと幾つかの黒人大学で教えた亡命学者の生き方やディレンマを探るなかで、この時代の南部の現実にも目を向けようとした。ブラック・マウンテン・カレッジにおける黒人学生受け入れをめぐる論争は、大きな現実のなかでの「コップのなかの嵐」の感があったが、論争がなんらかのかたちで継続したために、現実を変えていく足がかりとなった。同時に、亡命知識人が集中していたために、その内部での不協和音も聞かれた。ブラック・マウンテンでの経験は、南部の白人教育機関には、南部のジム・クロウの厳しい現実を変えていく力学が働きにくかったことも明らかにした。黒人大学のケースからは、アメリカ南部の状況に疎かった亡命学者が、南部の厳しい人種隔離の現実を目覚めていく様子や、亡命学者が黒人学生を新しい意識や世界に誘う役割を果たしたことが浮かび上がってきた。ここでも、亡命学者の態度は、疎外感から積極的な周縁性の利用まで様々だったが、芸術を通して、あるいは社会科学的な実験を通して、黒人学生および白人学生の意識と行動になんらかの変化をもたらした。他方、アメリカ南部との接触が亡命知識人にもたらした変化については、この論文で十分に明らかにすることはできなかった。知られざる亡命知識人はまた、なんらかの理由で多くを語らなかった知識人でもある。彼ら彼女らの遺産を伝える世代も消えていくとき、彼らの足跡もまた消えてしまうのであろうか。